



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## グラント先生の追憶

著者	谷口 敏郎
雑誌名	主流
ページ	6-8
発行年	1975-09-16
権利	同志社大学英文学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015256">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015256</a>

## グラント先生の追憶

谷 口 敏 郎

私より4歳年下のグラント先生に追憶文を書くなどは夢にも思われなかった。将に諸行無常の感一入である。

昨年(49年)私が同志社を去って3か月ほどして新町校舎の研究室で会った時、「先日、自分の誕生日に家内と共に遺書を書いた」と云われた。何故ですかと訊ねると、将来のこともあるのでと詳しいことは云われなかった。そして自分が死んだらこの部屋に持参の本は全部研究室の図書館に寄附するつもりだと云われた。

先生はその前年の暮軽い心臓発作があって数日室町病院に入院され、それ以来ずい分気をつけていられた。そして昨年8月を信州で暮し、9月に帰られてから後期授業の開始数日前に遺書を持って学校に来られ、何んでもサインが必要とかで北垣先生を探されたと言う話を後で聞いた。亡くなったのはその数日後である。

グラント先生とはずい分長いおつき合いであった。同志社大学に移られた頃はハニカミ屋で、同僚の昼食会にも遠慮されて仲々出席されなかった。ある朝興奮気味の先生を見つけて理由をきくと、ついさっき府警の巡査を怒鳴ってきたと云うのである。幼稚園の児童が横断歩道に出た途端に府警の自動車が廻り込んで来たのが先生のカンに触ったらしい。英語で怒鳴られてその巡査はびっくりしたらしい。先生は凡そ不正と思われることが嫌いで、この点ではいつもニューイングランドのピュリタンの良心を直接うけついで居られたようである。他人が不正に苦しんでいる時は身を犠牲にして救い出し度いという所があった。

先生の故郷はメイン州にあり、雪や氷と共に成長し、Bowdoin 大学卒業後、7つの教会の資金で中国に宣教師として派遣される予定であった。しかし運命は先生を戦後の日本に送り、同志社大学に送った。そして先生は新潟裏を知るに至って、平素ニイジマ・スピリットを口にされるようになった。

先生の前夫人はジーンと云う名でフランス系の美人であった。隣室で電話で話している夫人の日本語は完璧であった。日本女性と間違える位であったが、失礼ながらグラント先生の日本語は完成しなかった。この夫人はほんとに優しい感じのする人で、上野先生のこの夫人への追悼の辞によれば「雨にうたれた海棠の花」のような人であったが、グラント先生にとっては必ずしもそうでなく、むしろにが手であつたらしい。私は時々愚痴を聞かされたがアメリカのインテリ家庭では凡ての決定権は女房にあると云うことであつた。

お二人が四国で養女の形でひきとられた日本娘2人を育てて、一人は同志社大学の英文学科を卒業させ、その後2人をアメリカ人と結婚させられたこと、フアーロウの時は先づその家庭を訪問するのをたのしみにしていることを云われたのもついこの間のような気がする。今から11年ほど前と記憶するが、9月の台風の日、グラント夫妻は若いアメリカ人夫妻を飛鳥井町の家泊められた。何んでもその若い夫人がもつての外気儘者で、台風でガスがとまっているので冷い食事しかできないとグラント夫人が云われると、ガスが出ないのならカンテキで火を起せと云ったそうである。さすがの奥さんも激高して階段を駆け上った途端、足をすべらせて背骨を強打し、動けなくなったのでバプテスト病院に入院された。夫人が亡くなったのはその後一週目であつた。先生にとってこれは青天の霹靂のような災難であつた。その後私は先生の不幸を慰めるためよく下町へ出掛けた。ある時、杯をかたむけながら先生は云った。「この間、夜中にフト醒めて、自分一人だけ日本にいると思うとたまらなくなり、飛び起きて家中のあか

りを全部つけて、お静さん（メイド）を叩き起して、朝まで祈り続けた」涙の出る思いであった。

先生は7年目毎のファーロウにはいつも貨物船を利用され、時には北海道の室蘭まわりの船でパナマを通り40数日を費して帰られた。

理由は飛行機が嫌いでもう一度も乗ったことがないからだと言うことだったが、その後、前夫人が所用で独り飛行機で帰国されたことがあって以来多少考え方が変わったようである。

その後3年経って再婚されたが、最後のファーロウの時は往復ジェットを利用されたい。

目をつぶれば、あの巨体とにこやかな顔が浮ぶ。いつも冗談を云い人を笑わせ自分も笑っていた先生。私は年下の先生から冗談まじりに色々の事を教えられ学んだ。私自身の身の上相談でも先生はアメリカのセンスで明快な解答を与えてくれた。

先生は学生を愛し、同志社の生活を愛し、庶民を愛し、酒を愛し、不正を憎み、形式や儀式を憎み、愛を最高の信条として同志社大学のために一生涯を前夫人と共にささげられた。形破りの宣教師であったが、私は先生を失礼ながら一度も宣教師と思ったことがない。

心の通うたよりになる兄弟のように思っていた。今度生れたら日本人として生れるつもりだ、自分は誤ってアメリカ人に生れたと云ったグラント先生はもうこの世にいられない。